

—霜夜に冴える鐘の音—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮 澤 清 治

祭り灘子の聞こえる夜

祭り灘子が、遠くから風に乗って、強くなったり弱くなったりして聞こえてくる。

こんな幼いころの思い出がある。秋祭りの灘子のけいこをしている笛や太鼓の音を聞くと、心が浮き立つような気持ちになったものだ。

江戸の昔、秋の月の明るい夜、本所の町々でどこからともなく祭り灘子が聞こえてくる。あるときは、西から聞こえたり、あるときは東から聞こえたりする。こっちなと東の方に行くとこんどは北から聞こえてくる。

音源探しに本所中をぐるぐる回り、気がついたらいつの間にか音は止み、へとへとになって道端で寝込んでしまったという笑い話もある。音に近づこうとすると、音が別の方向に逃げてしまうのだ。

あるとき、本所東駒形の殿様が、この「化け灘子」の正体をどうしても知りたいと思い、ある夜、家来たちを一度に四方八方に歩かせて、音の出どころを探したが、ついに探し出せなかった。

こんなことが何度かあって、あれはタヌ

キがどこかの森で腹つつみを打っているんだと、この界わいの江戸っ子は、タヌキのせいにして楽しんだ。そして「タヌキばやし」と名づけて、怪談「本所の七不思議」の一つにまとめた。

火の見やぐらの鐘の音

戦前、郷里の家は JR 信越線の近くにあった。ある寒い風の落ちた夜のことだった。夜更けまで本を読んでいたら、約1キロメートルも離れた長野駅に汽車が止まる音、駅員が駅名を呼ぶ声、発車の汽笛などが駅のホームで聞くのと同じ明瞭さで聞こえた。あまりの不思議さに、今でもありありと覚えている。

もうひとつ。霜の降りるような冷える夜、火の見やぐらの半鐘の音が澄んで聞こえた。火事は近いなあと思いながら寝てしまった。翌朝になって新聞を見たら、あまりに遠い町の火事にびっくり。遠くの半鐘の音が意外に近くに聞こえたのだった。

このように音がよく聞こえる寒い夜、母は「明日は暖くなるよ」と言った。



火の見やぐらの見える風景（新潟県弥彦村）

空から地面から「ザー」

25年も前の経済活動が盛んな時代の話。

昭和47年10月3日午前0時20分ごろ、横浜市内の住民から「ザーという音が10分間も続いている、空からか地面からか、どの方向から聞こえてくるのかわからない」と奇妙な電話が110番などに、午前1時すぎまでに60本もかかってきた。

訴えは、海沿いの市内神奈川区大黒町から内陸の港北区に及んだ。県警などで羽田空港に問い合わせたり、爆発事故の有無を調べたりしたが原因はつかめなかった。真夜中の変な音に市民は不安のどん底に突き落とされた。

照会に応じた横浜気象台防災係のMさんは、「秋になると、ふだん聞こえない京浜工業地帯の24時間操業の工場の機械音が、10キロメートルも離れた港北区などで聞こえ

ることがよくあります。タヌキばやしに似た現象でしょう」と説明した。

Mさんは、浅草の人で子供のころ、タヌキばやしの話を聞いたことがあるという。それにしても、とっさの名解説には脱帽した。

幽霊のうらめしやを思わせる怪音の正体は、枯れ尾花ならぬタヌキばやしで一件落着。

「馬肥ゆる夜々聴く狸難子かな三汀」天高くの秋の俳句にこんな句があった。

気温の逆転層のいたずら

このような音の不思議な現象は、現代の科学では「音の異常伝播」という。秋から初冬にかけて、静かな夜に地面付近の空気が冷え込むと、上空の暖かな空気との間に気温の逆転層ができる。

この逆転層の面で、音が反射して伝わるので、音が遠くまで伝わる。また、地形に応じて、うねる逆転層の面で、音が反射するので、あらゆる方向から音がやってくるように聞こえる。不思議な現象は逆転層のいたずらだ。

逆転層は、低気圧が近づいて上空に暖気が入ってもできるので、音の異常伝播は悪天の兆しともなる。

近ごろは、騒音が多すぎたり、住宅がサッシ窓などで密閉されがちなので、「タヌキばやし」が聞きとれないのは寂しい。

天気のことわざに次のようにある。

○遠寺の鐘の音ははっきり聞こえれば晴れ

○電車の音(汽車・船の汽笛、川瀬などの音)が近くに聞こえると雨